



## 随 想

### 描がかれざる壁面

大江直吉

中学時代の友人が久し振りに同志社を訪れたといつて、僕の職場を尋ねて来てくれた。話は自分が学んだころの思い出や、校舎、校庭の変りかたなど、校友の誰れもが懐しきをもつて語るコースであった。

それは時計台であり、チャペルであり、クローバの生え繁っていた校庭でもあった。

その後、新しいキャンパスとして発足した新町校舎へ案内をした。新校舎は堂々と北天に高く、ドッシリと重量感をただよわせて建っていた。入口の電気時計は、この校地に彰栄館の時計とは異なつた、新鮮さを与えたよ

うであつた。

その後、その友人から音信があつて、チャペルの壇上にある聖書台と、それに刻まれてある「我者道也、我者真也、我者生命也」の言葉だけが、印象となつて心に深く残っている。あの聖書台を今回できた新町校地に石で造つて、その上には聖書が開かれて、聖句の一節が刻まれてあれば、校地全体が、ひきしまるように思う、と書き添えてあつた。誰か篤志家の寄付を待つて、彼の夢を実現させることは、好ましいことかも知れない。

学校が大きくなつて、数々のビルディングが出来上つている。正面から見ると、入口や窓があり、また多少の飾りも加つて、一応の恰好は出来上つているが、側面の壁は、おうおうにして、白いセメント壁か、タイル一色である。何の雅趣もない。

白いセメントの壁面をジィット眺めていると、なんだか物狂おしくなつてくる。真っ白な壁面できちんと囲まれた病室にいるときのように、神経が尖つてきて、物でもブツツケたくなる。「救い」がないからであらう。

あの無地の壁面を、見上げるごとに、僕は空想の絵を描きたくなるのである。勝手に壁

面に「額ブチ」を創り上げて、そのキャンバスに想像の絵を描くことにしている。

大阪の「フェスティバル・ホール」を河を距てた南面から眺めると、あの巨大な、ネズミ色の壁面には「月や、星に、麗人が乱舞している図が浮彫にしてある」のは、まことに羨ましいと思つた。

夕方、壁面には冬の太陽が軽く照つていた。しばらく立ち止まらせる魅力は十分あつた。

描がかれた絵は、やっぱり一つの型にはまつてしまふ。白いセメントや、タイル一色の壁面、それはどんな絵でも自由に描きうる未製のキャンパスである。描がかれた絵より、描かれざる絵の方が、数倍美しいかも知れない、という空想が飛んだ。

同志社の教育は、描がかれた絵ではなくて、むしろ描がかれざる部分の多い絵のような教育であつて欲しいと思う。

形として、表面に現われて来ずに、心の底深くに沈んで残るものの方が、より一層重大であるような気がする。

しかし、ものはやはり形あるものを通してこそ残るものである。ちようど、キリストの

像を見て、その信仰の心を深めるように、形のあるものを通して形のない心の底深く残させるためには、学校も校庭は整備され、建物は美しく、楽しい壁面であることが大事である。

そして、キャンパス全体から、調和された妙なる香気がたどよわねばならないと思う。

(事業部長、就職課長)

## 禅と西洋

緒方 宗博

一 近年西洋人の禅に対する関心が高まりつつある様子である。その原因は何であるか。

(一) 核兵器の発明により生命の危機が感じられてきたこと。

(二) 生活が高度に機械化したこと。

(三) 人間が疎外されていること。

等がその主なるものではないかと思われる。禅では随所に主となることを強調する。それは主体的にも考えることである。主体的にものを考えるとは一切の二元論を脱却することである。

狩野探幽が妙心寺の法堂の天井に龍の画を書きよくに頼まれたときに、『どうか生きた龍を見せて貰いたい。そうすれば描きましよう。』といった。時の妙心寺住持は探幽に龍の公案を与えて一週間坐禅工夫をせしめた。そして探幽が描き上げたものが、現存の妙心寺法堂の天井画であるという。そしてこの画はこの種の天井画中の白眉であるといわれている。

現在の西洋思想の中で禅に最も近接していると思われるものは実存主義と精神分析学とであろう。そしてこれらのものが禅と同じものであると主張する人もある。しかしそれはそうは思わない。

### 二

ムーニエの『実存主義の樹』という図によれば、実存主義は旧約聖書、十字架上のイエス、アウガスチヌス等のキリスト教思想およびソクラテス、ストア派の哲学、アリストテ

レスの思想に根を持っているということである。そうである限りそれは東西相対立する西の思想であり、東の考え方の代表である禅との間には何か越え難い一線を画しているように感じられる。そしてこの一線が両者の思想の死活を決めるところのものであると私は思う。

精神分析学は無意識的なものを意識的に訳読するところにその特殊な功績がある。しかし、そこにいわれている無意識的および意識的なものは、禅からみれば共に意識的なものでしかない。禅にいう無心というものは、精神分析でいう無意識とは次元の異なったもののように思われる。

現代精神分析学界の泰斗エーリッヒ・フロム博士は禅にいう悟りの境界と精神分析学界において論じられているウエル・ビーイングの精神状態とは同じものであるといっているが果して然るかどうか。

(相国寺山内、長得院住職。ZEN STUDY CENT)

ニ主等。同寺院にはミス・デントン、星名久先生など同志社関係者の墓がある。( )

## 突然の死

片山慶次郎

先月の十日に、私は突然父を失った。息を引きたる三十分程前に駆けつけたが、すでに意識はなく、大きな駢の合間に苦しそうな呻き声を発していた。それが次第に緩慢になり、付添った医師が脈を確かめるころには、もう静かに眠っているような状態から、吐く息も残り少なくなったのであろう、かすかに口から洩れる「スー」という音が止まり、そのまま帰らぬ人となった。

この日、親父は神戸に能の催しがあり、私の兄を伴って昼前に京都を立てていた。車の好きな親父は、時間のかかるのも厭わず、わざわざ兄の運転で同乗して行った。道中、今日の演目である「求塚」について話したり、ラジオを聞いたり、また冗談をいい合ったりして大変なご気嫌であったという。

求塚といえは能の方では「砧」なんかと同じく、かなり重い位の曲となっているし、親

父も四、五年振りに手掛けるとあって、相当張切っていたに違いない。兄の話を聞いても、倒れる寸前まで常の親父と全く変るところがなかったそうだ。楽屋で装束を着けている時でさえ、いつものように軽い冗談口をきき、舞台にかかっていたからは、むしろ調子がよいと思えたという。そして曲なかば、「語り」の最中にブツンと謡が切れ、「地謡でノ」と叫んだのが最後であった。あとは駢をかいている父を兄や後見の人達で、ともかく切り戸口の中まで運び入れ、髪をとり、面をはずしただけで装束の帯は缺で切断し、胸を棄にして横たえた。これが医師と身内の者が親父に与えうる最大限の安楽であった。

脳溢血はその場を動かしてはいけないと聞く。だが能の舞台には幕がない。いかに不様に倒れても、その姿を観客にさらすことになるのである。求塚のシテは早春の野辺に菜を摘む若い女の姿である。その姿で髪と面をはずせばどうであろうか。瞬時にして意識を失った父ではあるが、「若女」の面の下に、生と死のギリギリの境に踏み耐えて「地謡でノ」と叫んだ顔は、おそらく苦痛に引きつれていたのであろう。

その時の写真をいただいたが、自分で体を支えられなくなった父は、両手を前につき、少し伏せ目になって小さく坐っている。かなり大きな体格の人だっただけに、より初々しく恥らいでさえ見える最後であった。これは観客にとっても、また身内の者にとっても、大きな救いであつたと思う。常の父を知る人人には、余計に涙をさそう姿ではあるが、「悲惨」という残酷さは全く感じさせなかった。

舞台で面をはずし、それを写真にとられていたらと思うと全くぞっとするし、私がそんな写真を手にしたとしたら、訳の判らぬ怒りをその写真家にブチつけていたと思う。「舞台で死ぬのは武士が戦場で討死するようなものだ」と、新らしがり屋の雑誌がえてして古風なことを書く。馬鹿に思う。一層書きたいのなら「戦場で死ぬより勝利を手にして凱旋すべきである」と書けばよからう。それにしても人の死というものがこんなあつけない形で音信れてよいものであろうか。生死の境という言葉さえあるに、そこに止まる時間も、思惑も、意志も、一切を何物かが剝奪したようなむごさを私は痛感する。切戸口に横たわる父は、これから面をつけて舞台上に出

る人であり、能の途中に面をはずして去った人とはどうしても思えないのである。死というのは、そして生というのもこうした形のものなのだろうか。

（昭三〇年文学部卒。観世流能楽師）

## オハイオの夏と音楽

西郷 辰三郎

アメリカは、オハイオにいちばん長くいた。日本語の「お早よう」と同じ発音で、私にはなつかしい土地だ。一陸千里の麦畑や、とうもろこし畑が、まるで大海原のようにひろがり、アメリカの穀倉の一つでもある。その間、ところどころに島のような丘があつて、まるまると肥った乳牛や肉牛、豚類の群が三々伍々、悠々と遊びまわっている。

ギラギラ光るオハイオの太陽は、万物を豊かに育てるが、なかでも夏のとうもろこしの成長ぶりは、すばらしく、畑では、林のように天に向かって、ギユウギユウと伸び上る音が、夜の静寂を通して、きこえるほどである。やがてそれらの実は、ガラガラと大きな

機械で、刈り取られるのであろう。

わたくしはよく、この大海原のようなくらい、もろこし畑に出た。畑の中を、はるかかなたの地平線まで、まっすぐにのびているかのようなハイ・ウェイを、緑の風をふんだんに受けながら、ビュービュー走る真夏のドライブは、大平原のアメリカならではの味わえぬ夏の涼味であらう。

夏の涼味の豪華版は、なんといつても、ちよつと隣のペンシルベニヤから、ニューヨーク州のナイヤガラに出かけて、あの万雷のような瀑音をきき、珠玉のようにとびちり、吹雪のように舞い上る水煙にうたれることである。カナダ側からみえる馬蹄形の瀑布は、さらに壮大で、ここでも、日本の滝とのスケールの相違を感じるのである。

ある夏、クリブランドの南方にあるワナキーというところで、青少年達のキャンプに参加したが、そこは青々と茂ったリングゴ樹の高原で、オハイオの大平原を見おろすことのできる眺望絶景の場所だ。夕方、あたりが暗くなるころ、キャンプファイヤー住いの集いをやる。いろんな思い出の中でも、このときクロスビー牧師の歌ったウエスト・インディ

アンの「主の祈り」が、いまなお心に聞こえる。牧師の独唱と、それに応えるキャンパーのハーモニーが、夕の静かなこの高原から、大平原へとひろがって、実に美しい。簡単なハーモニーであるのに、どうしてこんなに美しいのであろう。それは、頭の歌というよりは、無心の帰依から生れる祈りの歌か、信仰の歌であるからなのであろう。ファイヤーの力がなくなり、皆で祈りの最後のアーメンをうたつて、キャンピンに帰るころには、星がキラキラかがやいて、日本の夏の夕べを、私はいつそうなつかしがったのである。

かつて、同志社の予科時代に、英語の浅野先生から習った、ジョージ・ギッシングのヘンリーライクロフトの手記の中に、次のような言葉があつた。

——私は、音楽という甘露が、期待した時期待したところにおいて、与えられるよりも、むしろ偶然の機会を通して、自分に恵まれるときの方が、自分の心をよるこぼせ、楽しませるものであることを知っている。小川の流れに沿ひ、森の中を逍遙しているという自然の中で、ふと、ある家からもれてくるピアノの音に、心はひかれて、私はその音楽

の美しさにしばしば、たたずむのである——。

同志社弘風館の一教室で、このようなギツキングの詩魂に、心をうばわれた予科生の私が、心と時とはすでに二十年を経たオハイオの夏の夕ではあったが、ワナキーの丘で、何の奢る風情もなく、華やかな化粧もない、あのクロスビー牧師とキャンパーの合唱と祈りの歌をきいて、ジョージ・ギツキングのように、音楽というものの、まことに天来の甘露であることを感じたのである。

(番里中・高・宗教主任)

## 安 中

原 柯 城

私は昨年一月二十七日、東京での所用のあと、日曜を利用して、上州安中を訪ねた。

安中は純白の雪の浅間と熔岩が天にそそりたつ妙義を西に望み、北に榛名、東に赤城が聳え、所謂上野三山の支配する地域であり、碓氷川と九十九川の二つの激流に挟まれた高原の町である。昔は中仙道の宿場として栄え

たところであり、又私達には忘れることの出来ない、新島襄先生の父祖の地である。

杉並の冬日縞なすうまや路

安中に在ること僅か四、五時間の短い旅であったが、浅間の風す雪時雨に頬をうたれ、碓氷川の清冽な瀬の音をききながら、四方の雪岳を仰ぐとき、私の身も心も浄められゆくのであった。

旅人として、ここに行つさえかかる思いがしたのに、ここに生をうけ、四季に育まれた人々の精神の清く逞しいであろうことは想像に難くない。

新島襄先生は安中では生れず、安中の城主板倉侯の江戸屋敷に生れた、然し襄の精神は遠く襄を育てた父祖の教育に求めねばならない。この父祖が生を亨けたのが安中である。ことに襄の生長には祖父弁治の与えた感化が大きいのである。

この父祖の家が今も安中に残っている。今住む人も高潔なゆかりの人らしく、障子に一点の汚れもなく、真新しい純白の障子をめぐらし、つつましく住まわいられたが、その

障子にひびく碓氷川の清冽な瀬音は新島襄の精神を生むにふさわしいものであると思われ、旅の心も一層ひきしまるのであった。

姪に今も瀬音きびしき碓氷川

雪岳をへだてけがれなき窓障子

安中の城址の一隅に、信徒が新島襄先生に捧げた「新島記念会堂」がある。身を献げ守つていられる田中省三氏に聖堂を案内していただいた。

いまだ芽吹に早い樹々が聖堂に枝影の模様を描き、折から窓よりもるる、讚美歌に小鳥が声をさし挟むのであった。

聖堂に姪ありて集ふ安息日

聖玻璃の冬日あまねし諸人に

(昭六・経・馬酔木同人)